

## 大平総理の政策構想

伊藤善市

### 環太平洋連帯構想

大平さんは、昭和五十三年十二月一日の臨時党大会で、自民党の新総裁に選出されたが、これに先立ち、新政権の政策の基調となる「政策要綱」を十一月二十八日に発表した。その中で外交面については、日本が米国、カナダ、オーストラリア、ニュージールランド、アセアン諸国など、太平洋地域諸国との結びつきを強化する考えを明らかにした。さらに第一回のパン・パシフィックの主要国会議を、翌年の東京サミット前に開催する意向を表明した。

大平さんは「米国がラテン・アメリカ諸国に対し、また西独がECに、ECがアフリカ諸国に特別な配慮を行っているように、日本が太平洋地域諸国との連帯をとくに重視するのは当然のことだ」と語っている（ジャパン・タイムス・昭53・11・29）。私はこの記事を読んで、「この発言は大平氏の人柄をよく知っている関係諸国から好意をもってむかえられることだろう」と書いた（山形新聞、昭53・12・12）。

周知のように世界の歴史は地中海時代に大きな発展をとげたが、その次には大航海時代をへて大西洋時代が展開し、ヨーロッパとアメリカの時代をむかえた。ところが今世紀に入ってから、次第に太平洋時代をむかえ、第二次大戦後、日本の高度成長の影響もあって、大西洋沿岸諸国の貿易よりも太平洋沿岸諸国

のそれが上回るようになった。現在、中国の沿岸地域で繁栄している経済特区の将来を展望すると、太平洋時代の未来は明るいといわなければならぬ。

大平さんはこのような事実に注目し、太平洋時代における創造的な国際協力関係の重要性を「環太平洋連帯構想」として打ち出されたのだが、その先見性には深い感銘を覚える。大平さんは総理として、昭和五十五年一月にオーストラリアを訪問し、メルボルンにおいて開かれたフレイザー首相主催の午餐会において、次のようにのべている。

一昨年、私は総理就任の際に政治理念の一つとして、『環太平洋連帯構想』を提唱いたしました。私は、現代の国際社会を特徴づける最も主な傾向を「相互依存の深まり」として捉えたいと思います。今、この深まりの中で、近年、環太平洋諸国間における友好と協力の関係は著しく前進しました。今日これらの地域には最もダイナミックな経済が生まれ、多彩な文化が咲き、しかも、これらの国々をへだててきた太平洋は、さまざまな交通通信手段の発達によって、安全で、自由で、効率的な交通路と変ったのであります。かくして、広大かつ多様な太平洋地域は、歴史上はじめて、一つの地域社会になりうる条件をもちました。

しかしながら、過去の地域的な協力の多くが、共通の言語、共通の文化、共通の伝統等の同質性を軸として、その絆を強めてきたことを想起するとき、多種多様な文化的、歴史的背景をもち、経済発展の段階も異なるこれら太平洋諸国の間に、果たして、新しい協力関係、それに基づく新しい文明が創造され得るかと問われるかもしれません。

私は、このような困難な課題を解決しうる手がかりは、各国の文化的独自性と政治的自主性を理解し、信頼しつつ行われる地域協力であり、かつ地球社会時代にふさわしい開かれた地域協力であると考えます。環太平洋諸国の連帯は、決して排他的なブロックの形成を旨とするものではありません。

私は、日豪両国が、太平洋地域の連帯について、とりわけ重要な役割を果たし得るのではないかと考えております。第一に、日本人は、長い間東洋の偉大な精神文化の影響の下に独自の創造性を培い、その力をもつて、明治以後百年余の間に、西洋の文明を十分に消化吸収することに成功した民族であります。

また一方、豪州の国民は、西欧にその人種的、文化的起源を有しつつ、アジア・太平洋地域の新大陸に作られ、そしてアジア・太平洋という新しい環境に対する高い感受性と理解力と創造的な適応力を示してきた民族であります。さらに、豪州は、百力国以上の国をその母国とする人々によって成り立っていると伺っております。このような多様な文化と、人種グループの存在が、豪州独自の文化創造への推進力となっていることは、割目すべき事実であります。

わが国も豪州も、国民のたくましい活力によって、歴史的に見れば、ごく短期間にこの偉業をなしとげました。日豪両国は、新しい太平洋文明の創造の重要な担い手となるべき国であります。

このスピーチは、大平総理の政治外交理念の一つである環太平洋連帯構想を総理自身が対外的に、しかも英語で表明された最初のものであった。大平総理の政策研究グループの中で環太平洋連帯研究グループが発足したのは昭和五十四年三月のことだが、大平総理亡きあと大平正芳記念財団が設立され、大平正芳記念賞と環太平洋学術研究助成賞が設けられることになった。大平さんの精神は沢山の人の、心の中に生きており、今後とも永遠に生き続けることであろう。大平さんの志は永遠に不滅である。

## 田園都市構想

大平総理の政策研究会に田園都市構想研究グループが設置されたのは、昭和五十四年一月のことだが、「田園都市」という言葉から美しさと楽しさといった明るいイメージが浮かんでくる。その報告書によれ

ば、「都市に田園のゆとりを、田園に都市の活力をもたらし、両者の活発で安定した交流を促し、地域社会と世界を結び、自由で、平和な、開かれた社会——そうした国づくりを目ざす構想を田園都市国家構想」と呼んでいる。

この構想が生れた背景として、第一にわが国が、西欧先進国の工業水準、所得水準に追いつくという、明治開国以来の長期国家目標をほぼ達成したこと。とりわけ、新幹線網、テレビ、自動車の普及などは、農村生活を根本的に変化させ、都市と農村との伝統的な格差、対立が消滅に向かいつつあり、田園都市国家の建設という、新しい文明の段階へ挑戦することを現実可能にしていること。第二に、長期にわたる近代化、工業化、都市化、大衆化、情報化などの、経済社会の巨大な構造変化を背景に、国民の意識や価値観にも重大な変化が進行し、二十一世紀に向けての新しい国民的合意ともいうべき願望が、着実に形成されてきていること、をあげている。

すなわち、「かつてない自由と豊かさは、ともすれば見失われがちであった人間性のいくつかの大切な側面への反省を促し、日本文化の優れた特質を再発見させるとともに、より円熟した、より高い人間的欲求を目覚めさせるにいたった。国民は、人間の内面に深く根ざした精神的、文化的な豊かさ、生活の質と多様性、自由と責任の均衡、地域社会の個性や、家庭、地域、職場におけるあたたかい人間関係の回復、ゆとりとやすらぎのある居住環境、人間と自然と機械の生態学的な共存と調和、人間の各生涯の時期に応じた望ましい環境と福祉の条件の整備などを高い水準で求めている。こうして、田園の住民は、都市的な活力と文化の多様性をますます強く求め、都市の住民は、自由と便益を享受しつつも、その上に田園的なゆとりと自然の恵みをより強く求めるようになっていく」というのである。

さらに、「田園都市国家構想は、『文化の時代』の国づくりを目指し、人間と自然との調和、個性ある地域産業の発展とともに、各地域社会に質の高い雇用機会と所得水準を提供しようとするものであり、これ

まで過度に追求されてきた中央集権、中央集中の流れを見直し、政治的にも経済的にも文化的にも、諸機能の分散、多様化の方向と多様な地域社会の展開を目指すもの」だといっている。つまり、田園都市国家構想は、新しい地域主義の提唱なのである。

たしかに、先進諸国に追いつくことが明治以来の国家目標であったから、日本経済を近代化し、産業構造を高度化し、貧困の克服に挑戦するために、資本も人材も総動員して中央に集め、その潜在能力を全面發揮させようと努力したことは、理にかなっていた。さらに第二次大戦後、この「発展への意志」に拍車をかけたことも当然のことであった。とくに昭和三十年以降、急激に展開した工業化と都市化が民族大移動を引き起こし、過密、過疎、格差、環境といった問題を発生させたとはいえ、先進国へ追いつくという明治以来の長期国家目標は、ほぼ達成した。同時に、明治以来一〇〇年間、構造的に赤字基調だった国際収支も、いまや慢性的黒字基調へと転じ、日本は名実ともに豊かな社会へ突入した。

だが、昭和四十年代の後半から始まった、公害の多発等に見られる環境の破壊や、四十八年秋のオイル・ショックが象徴するように、資源制約、国際通貨不安、国際的スタグフレーションの進行が日本経済を大きくゆさぶり、地域経済社会に、いろいろのインパクトを与えていることも事実である。いまやわれわれは豊かな社会に成熟しつつあるが、まさにそのために、豊かさや開発のもたらしたプラス・マイナスの成果から、逆に挑戦を受けているのであって、田園都市国家構想は、そのような挑戦に対する一つの解答である、といつてよい。総理は、昭和五十四年一月の第八十七回国会における施政方針演説で、次のように述べている。

経済的、物質的豊かさとともに、我々は、暮しの中に豊かな人間性、参加と連帯に生きるふるさとを取り戻したいと思えます。……私は都市の持つ高い生産性、良質な情報と民族の苗代ともいふべき田園の持つ豊かな自然、うるおいのある人間関係とを結合させ、健康でゆとりのある田園都市づくり

の構想を進めてまいりたいと考えております。緑と自然に包まれ、安らぎに満ち、郷土愛とみずみずしい人間関係が脈打つ地域生活圏が全国的に展開され、大都市、地方都市、農山漁村のそれぞれの地域の自主性と個性を生かしつつ、均衡のとれた多彩な国土を形成しなければなりません。

大平総理が提唱した田園都市国家構想は、政府が新産業都市のように地域指定を行って、具体的に田園都市を作ろうとするものではなく、国づくりの理念を示すものであった。

### 家庭基盤充実構想

総理の政策研究会が発足してから、その打合せや中間報告などをするために瀬田のお宅へ二度ほどつかがったことがある。「家庭基盤充実研究グループ」の議長を引き受けるように、という依頼を受けた時、私は家庭問題の専門家ではないのでいささか不安であった。

けれども大平総理にお会いして、「充実した家庭こそ、国民の安らぎのオアシスであり、日本社会の基礎構造をつくるものである」こと、「戦後の復興、発展を支えてきたものは、企業と家庭であった」こと、「政府が家庭に介入することは、なすべきでないし、政府が望ましい家庭像のあり方を示すことは、適当ではない」が、家庭基盤を充実させ、ゆとりと風格のある安定した家庭の実現を図っていくうえで、「家庭自らの自主的努力と相まって、政府がなにかお手伝いすることがあるのではないだろうか」ということを研究していただきたいのだ、という意味のことを静かな口調で語られた。私は喜んでこの仕事をお引き受けた。総理は昭和五十四年二月の衆議院予算委員会で、次のように答弁されている。

家庭はわれわれの生活にとりましてかけがえのないオアシスだと思えます。ここには打算とか嫉妬とかいうようなものはございません。善意と献身があるわけでございまして、ここで初めてわれわれは安らぎが得られるわけでございます。人生にとって非常に大事なオアシスだと思えます。また社会

にとりましても、ここがしっかりしていないと、いい社会ができないことは当然でございますし、国にとりましても、家庭がしっかりしていなくては何事もできないし、国の基礎は固まらないものと思っております。

大平さんの御家庭そのものが模範的なオアシスであったことは、多くの人が語るところである。大平さんは女優の檀ふみさんとの対談で、次のように語っている。

家庭は、善意だけがある世界じゃないだろうか。嫉妬とか、あいつをいつかやっつけてやるとういう、よこしまなことは一切ないでしょう。ほんとのやすらぎが得られるんじゃないだろうか。だから家庭というのは大事だと思えますね。……夫婦を軸にして作る家庭という世界は別世界です。外の世界はけわしい世界、油断のならない世界です。家庭に帰ると、非常に落ち着きと安心を取り戻すことができる。そこにはこわいものがない。それを守っていくことが大事なことでしょいか。

すでに一言したように、政府が家庭に介入したり、望ましい家庭像のあり方を示すことは適當ではない、という総理の基本的態度は正論であった。なぜならば産業革命以後に形成された核家族が変容をとげ、いろいろの家族構成からなる多種多様な家庭がすでに形成され、いろいろの家庭の共存ないし共生が必要とされていたからである。

われわれの研究グループが留意したことは、多種多様な家庭の形態、類型、家族のライフ・サイクルに対応して、多様な尺度で問題に対処するということであり、画一的発想を極力さけたということであった。同時に、家庭生活の設計と充実は、何よりも各家庭自らの自由と責任に基づき自立自助、多様な自主的努力に委ねられるべき仕事であって、政治や行政が画一的に、過剰に介入すべき事柄ではない、ということであった。A・トフラーは「夫が働き、妻が家事に従事し、子供二人のある家族を核家族と定義した場合、どれだけのアメリカ人がこの家族形態に該当するかと尋ねれば、その答えは驚くなかれ、全人口の

七%にすぎない。定養の幅を夫婦共働きの家族にまで広げ、子供の数を無制限にしても、なお米国の三分の二から四分の三の圧倒的多数が、これに当てはまらない」となし、その理由として単身者人口の爆発的增加、離婚、片親家庭の増加という事実をあげている（A・トフラー著、徳岡孝夫監訳『第三の波』、中公文庫、昭和五十七年、二八四—五ページ）。日本の場合は、アメリカと事情を異にし、アメリカのような家庭の崩壊は起こっていないが、多種多様な家庭が出現しつつあることは事実である。

大平総理は「家庭の基盤を充実させるものは、何よりも居住環境の改善であること」、また「子供は未来への使者であり、文化の伝承者である」と強調されている。かつてある新聞記者が、当時中学生だった大平さんのお孫さんに「福田さんや三木さんをどう思うか」とたずねたら、次のような答えがかえってきたそうである。

「福田さんも三木さんも一国の総理に選ばれ、それをなされた方ですから、有能で立派な人だと思います」。

新聞記者氏は当時、大平さんがいじめられていた事実に対して、お孫さんの感想を引出したかったようだが、模範的な大平家のお孫さんからはライバルを中傷するような言葉は一言も聞かれなかったことである。まさに満点の答であり、見事というほかはない。私は大平さんが昭和五十三年十一月、自由民主党総裁選への立候補に当たったのべた次の一節を読むたびにこに深い感動を覚える。大平さんの人柄を示すこの言葉をかかげて、この小論の結びにしたい。

「時代は急速に変貌しています。そして長く苦しかった試練を経て、ようやく黎明が訪れてきました。あたりはまだ闇でも、頭をあげて前を見れば未来からの光りがさしこんでいます。後を向いて立ちすくむより、進んでその光りを迎え入れようではありませんか」（『政治に複合力を』より）

（帝京大学教授・東京女子大学名誉教授）